

～男女共同参画社会の実現に向けて～

モア MORE

さって ひと ひと
幸手市女と男の情報紙
第12号 2007

モア(MORE)とは、より多く、よりすばらしいものにと、さらに女と男がより豊かに、と願いを込めて、この情報紙を命名しました。



竜巻のおどり

小さな竜巻が
洗濯機みたいに
くるくる回って
私のそばにやってきた。

竜巻は
さみしそうにしている
たくさんの落ち葉たちに
一緒におどろうと
優しく抱きかかえ
誘っていた。

みんな楽しそうに
おどっている
くるくるくるくとー。

こんなふうに
誰とでも仲良く
誰にでも優しくできるような
そんな人に
私はなりたい。

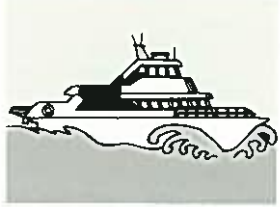
幸手中学校

2年 橋本 萌

(平成19年3月現在)

題「ぼうしやさん」 富塚國夫さん (市内南3丁目在住)

日本女性会議



今年は「We are～わからないから信じあう。知らないから支えあう。」を大会テーマに大会史上初の4000名が全国から集まりました。

内閣府男女共同参画局長の板東久美子さんより第2次基本計画の説明がありました。女性の雇用、職場環境、少子化、DVなど課題の多い中、今どこに向かっているのか。またライフワークバランスのお話もありました。

ひきつづき東洋大学経済学部教授の白石真澄さんから、仕事と家庭（家事・育児）の“両立”と言う内容で講演がありました。

「自分らしく生きる」ことのできる人づくり ～学校教育をとおして～

男女共同参画社会の推進に努める専門、教育現場に立つ教師、DVカウンセラー、パネリスト4人によるディスカッションの形で進められました。男女共同参画を推進するには、子どもの時からの意識改革が必要であり、学校教育をとおして、どのように展開してゆくかを論じました。山口県内の高校では男子を含め、家庭科の授業から男女共同参画に触れた学習を実施。また下関市内の小、中学校では生徒を対象に生活実態調査を試み、その結果は職業、家事、人間像など考え方に男女の差があるとの報告がありました。実質的な変革は容易ではないが、いろいろな面で学習し、「自分が好き」と思える人づくりをめざす指導の大切さと意義を強く感じました。

食の安全・安心を女性の眼から

「こどもの広場」主宰で幼稚園園長の横山眞佐子さんをコーディネーターに4人のシンポジストが各々の立場から食の安全と現状を語られました。殊に、現代は健康への関心が強く、サプリメントや健康食品を多く取りすぎ害があったりする。正しい知識を持ち、どんな食品にもリスクがあるので適量をとる。農薬をなるべく使わず本来の食物の味を伝えられるよう努力している生産者側の発表があり、子ども達にも米づくり等を体験させ命の大切さや育てる喜びや感動を共感していると力強く語られました。消費者も情報に惑わされる事なく食の安全を常に心掛け、正しく次代に伝えられるよう、食育の重要性も再認識した分科会でした。

We are～

わからないから信じあう。

知らないから支えあう。

ジャーナリストの山本美香さんの講演。高校生による朗読。和楽器（尺八・笙・土笛）と電子オルガン演奏・ソプラノ歌手モチエオ久美さんの熱唱の三部構成で進められました。

世界には65億の人々が暮らしている。異なる民族言語、宗教、世代。人と人が信じる術を失い、国と国が共生の道を捨てた時、不幸な衝突の

特 集



日本女性会議2006しものせきのシンボルマーク
さまざまな人が気軽にワイワイと集う姿をイメージしています。

地域の福祉づくり

～市民と行政のパートナーシップのまちづくり～

「福祉の」ではなく「福祉で」町づくりにこだわったのは、全ての計画に福祉をからめてゆくの狙いです。「誰もが地域と共に暮らす」を理念に運営している富山のNPOのデイケアハウスは赤ちゃんからお年寄り、そして障害児が一緒にいます。今の日本の家庭には何が足りないか？少子化、核家族が示すように、老人と子どものふれ合いが足りないどころか無いのです。この町にずっと居たいと思える【死にがいのある町づくり】を目指しています。

愛知県高浜市は町づくりにおいて、行政は黒子に徹し、男性の居場所づくりに重点を置いています。

住民から声をあげて行政を動かしネットワークを作ることが大切なことであると再確認しました。

中では命が犠牲となり、人の心も傷つき閉ざされてしまう。人間の根本はどの国の人も変らない。ただ生きて来た環境、文化が違うだけだと感じますと、従軍取材の映像を交え、山本美香さんは紛争地コソボ、チェチェン、アフガニスタンの現状を話されました。そして人と人が違うのは当たり前で、全てわかりあえなくても、理解しようとする努力が必要で、自分を受け入れてもらうには、相手を尊重し文化の違いを知り疑問を感じたら「それは何？」と聞いてみるのが大事。一つの事象を様々な角度から見るのが大切で、信頼関係を築くにはまず信じることでと、ご自身の体験を静かに熱く語られました。

日本女性会議

2006しものせき

平成18年10月6・7日、山口県下関市において『第23回日本女性会議2006しものせき』が開催されました。

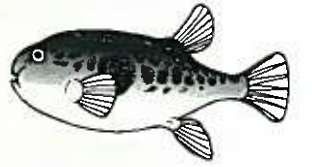
12ある分科会のうち参加した5分科会の報告をいたします。

男の生き方本音トーク～人と人が決めたことなら、人と人が話し合っただけで変えることができるはず～

固定概念『男は仕事、女は家庭』は、まだまだ私達の心に強く根付いています。家事や育児に奮闘中のパネリスト男性3人は、自分の仕事への影響や子育てをする男性への配慮の足りない社会に直面しています。しかし、子どもとの関係が深まり、妻に良い仕事をして欲しいと思うようになり、心が豊かになって人生にも深みがでてきたそうです。仕組みや慣習への意識を変えて、自分が納得した生き方をする楽しさ素晴らしさを語りました。『人間として尊重し合いながら生きられる社会。人と人が決めたことは人と人が話し合っただけで変えることができるはず。よりよい方向に変えていきましょう。』と、その力強い言葉に会場から大きな拍手が送られました。

私が信じた道。私の歩む道。

舞台や映像の世界で活躍されている女優市原悦子さんの講演。戦後の食糧難の時代、のびる、桑の実、ザリガニ等、口にできるものは掘り、土を耕し作物をつくり、少しの物も分け合っただけで飢えを凌いだ。決められた事はしっかり守り、妹たちの面倒をよく見た。暗く貧しい時代だったが心豊かな子ども時代を過ごしたと市原さん独得の口調で話されました。中学時代に出会った素晴らしい先生との大切な思い出が生涯に渡って市原さんの教訓になったこと。今こうしていられるのも多くの人の協力によるものと感謝して生きていること、また銀行員の就職が決まっていたが、どうしても芝居がやりたくてこの道を歩んで来たと言われました。そして人間はどんな人でも皆どこかに良い所を持っている。その良い所を見つけるのが私は好きです。嫌いなことは、「臭いものには蓋をする」「触らぬ神に祟りなし」「長い物には巻かれよ」です。人間生きていく上で『汗を流して働く』という原点を忘れず、今を一生懸命生きていますと言われました。最後に野坂昭如さんの「凧になったお母さん」を朗読。戦争が世界中からなくなるようにとの強い市原さんの思いが会場一杯に広がりました。



私もあなたも新しい一歩で！

～ともに輝く道を～

農村漁村における男女共同参画というテーマで3組の事例発表があり、東京農大の白石正彦さんをコーディネーターにパネルディスカッションが行なわれました。以前は仕事、家事、育児、介護まで一手に引受け、嫁は経済的にも時間的にもあまり自由がありませんでした。そうしたことから一歩前進する為の家族協定や家族経営協定という制度ができました。女性が家族で仕事をする中で人間らしく前向きに生きていく為に書面で家族の中で契約を結びます。内容は就業時間や休日、報酬、介護などさまざまです。これによって後継者も安心して就業できます。家族といっても個々の人格があります。お互いを思いやる心と責任をもって楽しく前向きに仕事や生活を送っていきたくて分科会に出席をしてあらためて思いました。

「歩いてきた道 歩いてゆく道 舞台に恋して」

男女共同参画推進講演会

平成18年9月2日(土)、北公民館に劇作家であり、演出家であり、女優である渡辺えり子さんをお迎えし「歩いてきた道 歩いてゆく道 舞台に恋して」をテーマにご講演いただきました。

講演に先立ち、当協議会の会長挨拶の中で委員による男女共同参画のPR寸劇が行われました。共働きの夫婦とその家族のある日のできごとです。休日残業で帰りが遅くなった妻を迎えたのは、ビールを片手にした夫、お腹をすかせた子ども達、妻はあわてて夕食の支度に取りかかる・・・この何気ない行動、あなたはどう思いますか?と疑問を投げかけると、会場からはさまざまな反応がありました。

そしていよいよ渡辺えり子さんの講演です。当日は早くから幸手に到着されて「今まで知らなかったけれど幸手という地名は良い名前ですね。街の皆がにこやかに握手してる街というイメージですね。」とおっしゃり、自分が幼い頃過した街と街並が似ているというお話しから、今日まで出会っ



「役者っていいな」と語る渡辺えり子さん

民生委員児童委員研修会

5月8日(月)、ウェルス幸手において民生委員児童委員協議会第2地区の皆さんに『男女共同参画』について話をさせていただきました。内閣府男女共同参画局のビデオの後、男女共同参画基本法、当協議会の活動報告をしました。性別的役割分担にとらわれず、個性と能力を発揮できる社会が今、最重要課題です。しかし、現実には男女間の不平等や疑問が多く、その表れの一つには非婚化、出生率の低下があります。子育て時期の働き方、育児休業法等、多様化するライフスタイルに合った取り組みが不可欠であり行政や職場・地域・家庭



PR寸劇

た人、できごとをおもしろおかしく語って下さいました。

生まれ育った村では皆の人気者で“天使のえりちゃん”とよばれていたが、小学校入学を期に都会に引っ越したら生まれて初めてデブと言われ、いじめにあったそうです。本を破られたり、掃除を一人でさせられたり、学校に行くのがイヤになり休みがちになりました。ところが学芸会で犬のお母さんの役をしたら皆にとっても喜ばれ、役者っていいなと思い始めました。三年生のときには褒め上手な先生と出会い、その先生のためにいろいろ頑張るようになりました。五年生のときには初めての戯曲『光る黄金の入れ歯』を書いたそうです。中学時代には小児リ्यूマチで友達を亡くしました。死んでしまったら二度と会えないと、人の死を身近で大きなことととらえ、戦争反対の気持ち強く持ちました。高校卒業後上京し、自分のことは全部自分でやらないといけなくなりました。母のありがたみや苦勞がわかり一人涙したそうです。一時間半の講演時間はあっという間に過ぎてしまいました。最後に「人は一人では生きていけないので、私利私欲に走らず周りの人達に感謝して生きていきましょう。」という言葉を残し、幸手をあとにされました。

で、より良い環境作りを認識すべきです。最後に、婦人運動家市川房枝さんの『男女平等の基盤は教育にあり』を伝えさせていただきました。人権尊重の理念のもと、男女共同参画社会を構築し大人としての責任を担うことが、子ども達の明るい未来に繋がることでしょう。

日頃から社会福祉活動に熱心に取り組む皆さんの真剣な姿勢に、感銘を受けた時間でした。

『男女共同参画』への理解を深めて下さりありがとうございました。



研修中の様子

ひとひと 女と男の共生セミナー

「健康について学びました」

平成18年10月22日（日）ウェルス幸手において、順天堂大学教授の安田美彌子さんを講師に「ライフサイクルと心の健康」をテーマに1回目を行いました。

ライフサイクル（生活周期）は、乳児期から老年期までの7期に分けられ、そして各々の時期に心の問題が発生します。例えば、思春期の子育ての秘訣では「1つ叱って3つ褒め、後の6つは放っておけ」しかし、現在の親は子どもが少ないため、すぐ子どもに手をかけすぎる。また、成人期に「ニート等」になるのは何故なのか。それは、親が豊かで生活の面倒を見すぎるからと話されました。

参加者のアンケートで「今日の素晴らしい講演を子育て中の方々にも聞かせてあげたい」と言う意見がありました。

『親は子どもを自立させ』『夫妻も互いに自立し』女性と男性が共に歩む社会を目指しましょう。



安田美彌子さん



鈴木幸子さん

10月29日（日）、埼玉県立大学教授の鈴木幸子さんを講師に「女らしさ、男らしさと健康」をテーマに2回目を行いました。

始めに基礎知識であるジェンダーについて伺いました。

続いて思春期、成人期、中高年、高齢期の体の変化と抱える問題。精神的、医学的男女間の性差をスライドを使ってわかりやすく説明して下さいました。参加者の多くは子どもの頃に、性教育を男女別々に受けたであろう中高年が大半を占めていましたので、一步踏み込んだ体の仕組みや、性に関する話しには戸惑いながらも、現状を改めて認識したのではないかと思います。

更年期症状のチェック、乳がんを早期に発見する正しい自己診断や簡単な尿失禁体操などの実践指導もあり、自分の体を知ることの大切さを痛感したセミナーでした。



ときめき感動の時『心みつめて』

私達が多くの人とお付き合いしていく上で相手に我慢がならなくて、言い争いになってしまうことが誰にでもあると思います。それが毎日顔をあわせる家族、職場の上司や同僚となると、いろいろ面倒なことになってきます。それはいつも生活を共にする身近な人だからこそ生じる問題であって、普通なら気にならないことがたまらなくなって爆発してしまうこともしばしばです。しかし、裏を返せば自分にとって大切な人だから「こうあってほしい」、「こう言ってほしい」という願望が強すぎて我慢ができなく

なってしまうのでしょうか。つまり好きと嫌いは背中合わせになっているのだと思います。感情が抑えきれないほど腹をたてている時は、自分は決して間違っていないと思込み、がんじがらめになっているものです。

そんな時ちょっと“心みつめて”自分も悪いところがあるのでは？と自分を振り返ることが必要ではないでしょうか？自分というものが本当にみえてきた時、自然に相手の長所がみえてくるものです。そうすれば心おだやかに誰にでも接することが出来るでしょう！！

輝きコーナー我が家の場合

今回は東5丁目で“鰻”“天ぷら”“川魚料理”のお店を経営されている関口勝美さん繁子さんご夫妻をご紹介します。

勝美さんは、幸手生まれの幸手育ち。6年の修業生活を経て地元幸手市内にお店を構え、何度か増築をして現在の店構えになりました。古くから続いている同業のお店が多い中「頑張っ来てました。」と笑顔で答えてくれました。

開業は1980年（昭和55年）11月12日。この日は勝美さんの誕生日であり、またご夫妻にとっては大切な記念日でもあります。「結婚、開業と続き、とても忙しい年でした・・・。」とふり返りながら一つ一つ思い出を語ってくれました。

その中でもおふたりのお嬢さんが小さかった頃、育児とお店の仕事の両立は並大抵の事ではなかったそうです。一日24時間。一年365日。夫婦が常に一緒に協力し合い乗り越えて来られた様子が伺



仲の良いご夫妻

えました。また今迄は連休をとった事はなかったそうですが、ここ最近になって連休をとり始める様になったそうです。旅行や映画などをふたりで楽しんだり、お孫さんと一緒に楽しい時間を過ごしたりしているそうです。

開業以来26年間。共に同じ道を歩きながら夢を語り合い喜びも苦しみも分かち合い、助け合い支え合いながら過ごして来られたご夫妻。お客様から言われる「おいしいね。」のひと言が何よりも嬉しいと語ってくれた笑顔は、いきいき、キラキラとても優しく輝いていました。

日本女性会議とは

1975年の国際婦人年が契機となって、日本の社会でも、女性と男性のあまりに違った生き方に気づき、同じ人間として、それぞれが自分らしく生きる社会づくりに向けての取り組みが始まりました。

1976年から1985年の10年間を「国際婦人の10年」と定め、女性の社会的地位向上をめざして、各国における問題点を挙げて、法律の見直しや制度の見直しが行なわれました。

日本においてもこの間に「男女雇用機会均等法」の成立や「女子差別撤廃条例」の推進、そして民法の一部改正などがなされました。

しかし、行政の力だけでは国民一人ひとりの意識改革にまではなかなか到達しないということもあり、市民の側から男女平等社会をめざして1984年名古屋市で開かれた会議が「第1回日本女性会議」と名づけられ、毎年開催されています。

今年は山口県下関市で開催されました。

表紙の絵



「切手を使って絵にしたらおもしろいのではないか」と思い、古切手を一枚一枚貼り合せましたと語る富塚國夫さん。製作を始めて20年以上になるそうです。

この絵はチェコを旅行した時の、ぼうしやさんの看板を題材として製作されたそうです。

● ● 編 ● 集 ● 後 ● 記 ● ●

近年、少子高齢化が進んでいる中、女性の社会進出が進むと出生率が下がるのではないかと疑問を持っていました。しかし、両者には相関関係などは無く、社会環境（施策、制度、価値観）の影響を受けて変化するようです。

「男は仕事、女は家庭」といった固定的な性別的役割分担意識が無くなるように、進んでいけたらと思います。

ご意見ご感想を事務局までお寄せ下さい。